年報および編集委員会報告

四月三十日に、東京本部において在京委員会が開かれ、年報編集及び秋の大会についての相談が次のように行われた。今回は各大学の行事等で欠席者があり、有賀・小池・福武・松原・中野が出席した。

去年の大会における討論の録音テープが、2回録音できていなかったことにつき、特輯号刊行は断念せざるをえないが、録音できた13の記録が、事務局の御尽力で謄写版刷りになって委員会へ送り頂いていたので、これをどのように生かすことができるかが最初に論議された。やはり、これをそのまま掲載しても尻切れトンボでむつかしかろうから、むしろ、これを投稿を依頼しようとする人々へ送りして、それに関連して、或は特に関連したものでなくてもよいが、原稿をもとめるきっかけとして活用できるのではないかという考えに一致した。

次に、事務局編集部の意義が、担当事務局の創意ある企画によって、交替あるごとに新鮮な村研運営を期待するところにあること、在京委員会は何等「本部」的存在ではなく、たんに年報委員会・編集委員会で、それが東京で行われるにしても、それらは年報編修・共同研究に関する討議の必要がある時にのみ開かれるにすぎないから、事務局は村研全体の活動、また平常の研究連絡機関たる「通信」編集を独自の企画で進めていただくものである点が再確認され強調された。（今回も在京委員会はテープのコピー一部送附をお願いしたところ、事務局ではガリ刷にしてあちこちに送り投稿を求めるという方法を既にとっておられたことが、この委員会のすんだ翌日の連絡によって判明した。）

年報編集については、執筆依頼先に関し未定であった地理学・歴史学の研究動向執筆者が、地理学については木内信蔵氏の紹介をえて矢島仁吉氏に確定、歴史学は依然未決定で氏にきまった。また〆切は六月末日ので五月中に再度執筆促進依頼の連絡をすることとなった。

最も主要な問題は今秋の大会に関する点であった。

（開催地について去年の総会で鳴子温泉「農民の家」とする意見が出て支持も多かったのでこれが第一案として考えられるが、関西以西の人々には遠距離すぎるという意見もありうると思われるので、第二案としては東京でということも考えに入れて、開催日時等と合せてアンケートを出してみてはどうかということとなった。

(1) 開催地は東北と東京のいずれを可とするか。但し、東北の場合、鳴子温泉のほかに郵政省関係（？）の施設借用も考えられる。（これらについて竹内利美氏より会場や宿泊の条件・費用等につき村研通信に投稿を求めてほしい。）

(2) 東北で大会を開く場合は泊り込みであるため夜に入っても議論を続けることができるという魅力があり、宿泊も三・四百円で一泊できるし、汽車賃も、遠くから来る会員の場合、東京でやるのと大差がない。遅延ないし回避切符という方法で安く上げることも可能である。

(3) 大会の日取りは十月とするが、日本社会学会大会が同じ月に東京であるので、これにも参加する人々の都合をも考え、東北でやる場合は、社会学会が土・日にあるからその後一日置いて火・水に村研大会を行う。村研大会をも東京でやるという場合は、社会学会（土・日）の前一日置いて、水・木に行う。日本社会学会の日取りについてはその開催校である中央大学になるべく早く

問合せて、それとの調整によって前記のように村研大会のほぼ前後する、金曜二日間、

(4) 或は、もしその希望が多ければ日本社会学会大会との日取りを全く離れた時期とする。再度旅費を要することを多くの人々が差支えないとされた場合は、(3)の方法をとらない。

(5) 以上の開催地等に関して会員全てにアンケートする。経費の関係でハガキ封入はしないでもよい。なお、前のアンケートには、共同課題は去年の総会できまったように「共同体」であるが、その研究報告希望の有無を問うと共に、報告希望の場合そのテーマ（簡単に内容を暗示するものであればよい）も書き添えてもらう。

(6) また、そのアンケートで、「共同体」をどのような視角でとりあげ、何をどのように論議するかという具体的な希望を会員から提案してもらう。以上は村研通信の記事として載せる。（多すぎれば要約しても類型別に紹介してもよい。）そして、課題委員会はそれにもとづいて去秋大会の計画をさらに具体化することにする。